

6-3

身体拘束廃止に向けての取り組み

身体拘束をきっかけに「個別ケア」の実践を

意識改革

個別ケア

特別養護老人ホーム 東京武蔵野ホーム

介護主任 萩原真美子

東京都板橋区小茂根4-11-11

TEL 03-3959-7421

E-mail tokuyou@komonenosato.com

FAX 03-3959-7438

URL http://www.komonenosato.com

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

社会福祉法人小茂根の郷は高齢者総合福祉施設として創設され今年で11年目を迎えています。利用者様によりよいケアを提供するために、様々な委員会活動を法人全体で取り組んでいます。東京武蔵野ホームは60人の高齢者が桜の木に囲まれて生活を送っています。

〈取り組んだ課題〉

93歳女性。認知症あり。平成17年12月ベッド脇で転倒し、左足首を骨折。立位、手引き歩行は可能まで回復するが、1人での歩行は転倒のリスクが高かった。認知症があり説明するもすぐに歩いてしまう状態だった。安全確保のため車椅子にY字ベルトを使用した。Y字ベルト使用後は車椅子自操を覚え、自由に徘徊していた。平成18年秋頃からY字ベルトを気にするようになり、自らY字ベルトを外し、立ち上がり歩いての転倒事故があった。Y字ベルトをすることが本人のストレスとなり笑顔が減った。家族は「歩いてほしい」と面会時、歩行練習をしていた。本人、家族の思いを理解し、「転倒は怖いけどY字ベルトは外してあげたい」と職員の思いにつながった。Y字ベルトをすることでむしろ事故につながると感じ、廃止する取り組みを行った。

〈具体的な取り組み〉

Y字ベルトを外すまでの経緯

- ・Y字ベルトを外すまでの計画を立てた。
- ・シーティングし本人の体にあった車椅子を使用した。
- ・行動パターンを把握するために毎日担当職員を決め、日中の行動を把握した。時間、場所、動きを細かく記録に残した。（Y字ベルトを付けたまま2週間行った。）
- ・時間を決めてY字ベルトを外した。少しずつY字ベルトを使用しない時間を延長した。（1ヶ月経過）
- ・完全にY字ベルトを外した。（2ヶ月経過）
- ・ソファに座ることで落ち着くことがわかり、落ち着きがないときにはソファに座ってもらうことで対応した。しかし活動量が低下し、夜間の睡眠が保てず、起きて出てきてしまうようになった。そこで、日中の活動量を保つため1日の車椅子とソファで過ごす時間帯のスケジュールを立てて対応し、歩行訓練の時間もつくれた。

〈活動の成果と評価〉

- ・毎日、観察する担当職員を決め記録をしたことによって1日の動きが把握できるようになった。
- ・事故発生の多い場所を分析し環境整備を行えた。
- ・Y字ベルトを外したことで利用者の所在確認を意識的にするようになった。職員が利用者に目を向けるようになった。
- ・本人に合った車椅子を使用することで、車椅子自操がしやすくなった。
- ・立ち上がり、歩行する機会が増えたことで筋力アップがみられ、歩行が安定してきた。
- ・Y字ベルトを外したことで本人のストレスの軽減、表情が豊かになった。
- ・家族との話し合いを続けることで施設側と家族との信頼関係が築けた。家族が喜んでくれている。
- ・Y字ベルトを外したことで、職員の達成感、自信につながった。
- ・身体拘束廃止のみにとらわれず、全体のケアの見直しができるようになった。

〈今後の課題〉

- ・起き上がり、ベッドセンサーの使い方の見直し。
- ・職員のレベル向上のため、外部、内部研修の実施。
- ・環境整備を行うことで身体拘束廃止対策をする。
- ・目に見えない拘束、心身、精神安定の取り組みを行っていく。
- ・身体拘束廃止以外の個別ケースの見直し。
- ・よいケア（その人に合った）をすることが、結果として身体拘束廃止につながる。



「個別ケア」の実施を